

## 精神的対話と探検

OB会副会長 古谷 精 宏

関大探検部を卒業してすでに7年近くなり、30才に手のとどく年になったにもかかわらずなかなか自分の思う様な仕事が出来ないでイライラして日を過している毎日です。部報作成にあたって何か原稿を、という事で書こう書こうと思いながらギリギリまで目先の仕事に追われて出来ず、大いに反省しながら書いてみようと思います。

書くと言ってもいまさら「探検とは？」といった実際活動における探検について語る資格は今の小生には、はなはだ疑問であるが、現役活動を速ぎかって久しい1人の仲間として最近の考え方を思いつくまま書いてみたいと思う。

最近、現役の諸君の活動を見るにつけ、すばらしく大きくなった様な気がする。活動企画も海外遠征の話しがほとんどだし、それにともなう国内合宿すら遠征費用とも考え合わせても、すこぶる多額な額になっている。

今、小生はその活動が出来る立場にあるとするならば、小生はその場所がどんな場所であれ、対人間、対動物、対植物、対自然といったものに対して、己という個人を常に意識しながら、より精神的な対話の中にその報告書なるものを作ってみたいと考える。

目的とする島、山、海、洞窟に行き着くまでの汽車の中、あるいは船の中での人、物、自然との対話そのものが、私見ではあるが、一つの報告書としての役割を果たすのではなかろうか。部の性格からは、あえて私は、それすらも試みてはどうかと思うのである。

百人百様の考え方をする時代であり、その個人個人の想いが、そこへ行っていない人にどれだけの夢と希望を与えることが出来るかどうか、ということを見ると、小生の考え方そのものが理解していただけないだろうかと思うのである。

活動の記録、報告というものがすべてに最優先する必要があるのは、クラブという集団の中での活動であるからこそであり、個人との違いでもあるわけである。一般的、観念的な見方としてたとえそれが単なる観光旅行的要素をもつ活動であったとしても、それに対する部員の若い情熱が個人個人の意識を通して、問題意識をもちながら先に述べた様な、個人を常に意識して、より精神的な対話の中にその報告書なるものを作ってみるとするならば、一つの活動として大いに認める必要があるのではなかろうか。

もちろん、異論のある人もあると思うが、しかし、探検部の活動として、あまりに探検を意識しすぎる必要があるだろうかと思うのである。意識が先立って帰阪後の報告書そのものが常にマンネリ的な遅い一連の報告書しか作り上げることが出来ず、そのまゝいつまでも残る様な記録が読む人に何の興味、夢を起さないものになってしまっているのではないだろうか。

今後とも活動の範囲は広く大きくふくれ上るだろう。小生は探検部として「部」という物の良さというか「ワク」の中での生活の良さを出来るかぎり後輩諸君に感じてもらい、人生の糧となるような生き方を学べる様望みたいのである。

(OB)